次郎長

次郎長翁を知る会
会報　第30号
平成24年3月31日発行
発行所　〒424-0806
静岡市清水区辻1-1-3-103
(財)静岡観光コンベンション協会
清水事務所内
TEL (054)388-9181
発行人　竹内　宏
題字
編集人　田口英爾
印刷所　㈱ニシガイ
TEL (054)352-2188

咸臨丸の最期　記録した旧幕臣杉浦梅潭

戦意のない徳川兵は斬り捨てられ屍体は清水港に浮遊した。賊軍に加担する者は断罪のお触れの中、「死ねば仏だ。仏に賊軍も官軍もあるものか。」と次郎長は丁重に葬る。拿捕された咸臨丸は新政府の御用船に。その最期は激浪にもまれて。

咸臨丸の最期を記録したのは、徳川幕臣の一人杉浦梅潭である。明治元年(一八六八)九月十八日、咸臨丸は清水港に修理のため碇泊中、新政府軍の富士山丸、武蔵丸、飛竜丸に攻撃され、戦死した乗組員の死骸が港内に浮遊するのを、次郎長が手厚く葬った。いわゆる咸臨丸事件の後、船体は新政府軍の右三艦によって拿捕、品川に曳航された。

杉浦梅潭・明治初期撮影

その最期については、あの文倉平次郎の「幕末軍艦咸臨丸」においても謎に包まれているとされた。拿捕された咸臨丸は、その後、明治新政府による北海道開拓使の御用船として人や物資の輸送役をつとめる。

勝海舟や山岡鉄舟らとともに駿府藩を支えていた杉浦梅潭は、明治二年新政府より開拓権判官として函館に赴任を命じられた。

杉浦には、幕末から明治にかけて克明に記された日記が残されている。とくに明治になってからのものは手帳に鉛筆書きという珍しいものだ。

鉛筆を走らせた小さい字は、次のようにしたためられている。

(明治四年八月)「十四日　咸臨丸西地より着函」

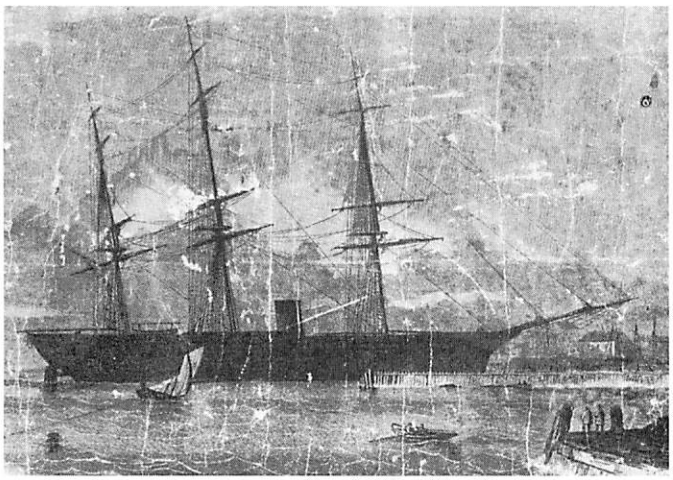
日記をさらに辿って行くと、咸臨丸は仙台支藩片倉藩の旧藩士たちを北海道開拓移民として輸送するため函館と本土を往復し、同年九月十七日、片倉藩旧藩士とその家族四百一人を乗せた咸臨丸が函館に入港、病死者一人を除き九月二十日、四百人乗船の咸臨丸は西地の小樽に向かって出帆した。

「二十日　今朝八時過、咸臨丸小樽へ出帆」と鉛筆で記されている。

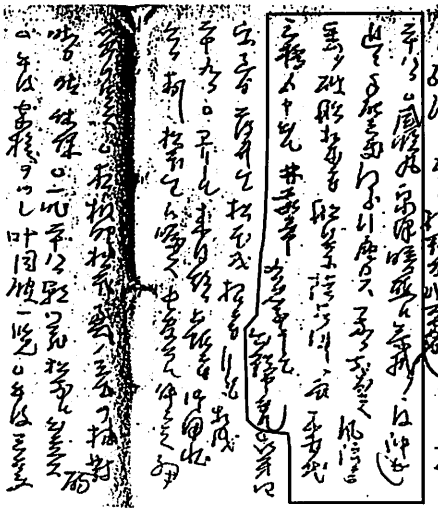
函館を出帆、小樽へ向かった咸臨丸は、木古内より函館寄りの泉沢沖で座礁、遭難した。

日記には、

「(九月)二十一日　晴　咸臨丸、泉沢辺の暗礁へカカリタル段、今日午後同処ヨリ報知コレアリ候ニ付、即刻田原吏生、同処へ出張を命ズ」


咸臨丸　木造三檣スクーナコルベット艦。全長163フィート。

「手帳に鉛筆で記された杉浦日記」



とある。さらに、遭難の情況が、

「二十三日　晴　咸臨丸乗船の移住民、泉沢ニオイテ滞リナク上陸、四百人ノ中、百三十人程、今日船ニテ着函ニ付、新本陣へ入レ撫育方致ス。△咸臨ノ存亡、未ダ洞察シ難シトイエドモ、船底余程破損シ、沖出シ多分六ケ敷カラントイウ、ナオ手配中ナリ。○咸臨丸ヨリ泉沢ニテ上陸ノ移住民陸行ノ分、夕刻残ラズ到着」

と記され、座礁した咸臨丸の船体自体については存亡の見通しが立たないが、四百人の乗船者については全員無事であることが確認された。

「二十八日　咸臨丸泉沢暗礁へ乗掛リ候後、沖出シ追々手配ノ処、何分行届カズ、一両日前ヨリノ風浪ニテコトゴトク破船相成ニ付、船具等陸上ゲ致シ候段、木村代三橋ヨリ申出ル、林敬三郎右見分トシテ出役申付ル」

これが咸臨丸について記された杉浦日記の最後の記述である。座礁をはずす作業は風浪が続き、船体破損、船具等だけを陸揚げしたと記されている。（上段日記のケイで囲んだ部分）

恐らく咸臨丸の船体は大破のまま泉沢沖の現場に沈没したものと思われる。

以上の記述は編集子の著書「最後の箱館奉行の日記」（一九九五年刊）によるものである。すでに十七年が経過しているが、本誌（会報「次郎長」）には初めて記すもので、次郎長の関わった咸臨丸の最期について、証言者が徳川幕臣の一人であることを、本誌の誌者に知ってもらいたいと思うのである。

明治元年の清水港

舞台を咸臨丸事件の起きた明治元年（一八六八）にもどす。

品川を脱走して北海道を目指した榎本武揚艦隊の一隻咸臨丸は、房総沖で遭遇した暴風のため難破、九月二日、修理のため清水港に入港した。その二日後の九月四日の午後四時頃、興津宿の朝比奈幹四郎は目の前の海岸二百メートル沖合を竜巻が東から西に向かって通過するのを目撃し、日記に書留めた。（窪田正志「清水港咸臨丸だ捕事件」）東海道筋は竜巻銀座とも言われるくらいで、秋口のこの時期には発生しやすいが、黒い雲と海水を巻上げながら沖合を進む竜巻の姿は、地元の人びとに不吉な予感を起こさせるものであった。

予感は的中した。九月十八日、清水港周辺の住民は時ならぬ砲声に驚かくさせられる。三保半島に抱かれた湾内に碇泊中の咸臨丸に、新政府軍の富士山、武蔵、飛竜の三艦が仕掛けた砲撃である。接舷による白兵戦の末、副艦長の春山弁蔵以下七名が斬殺され、死骸は海上に投棄された。咸臨丸事件である。

徳川幕府はすでに崩壊した。徳川家は駿府藩七十万石の藩主として存続を許され、無禄となった徳川家臣と家族たちは、江戸から続々と移住を始めている。天皇は御親政のため京都から江戸に向かっている。警備は厳重をきわめ、「賊軍に加担する者は断罪に処す」とのお触れは人びとをふるえあがらせていた。

港内には賊軍の死体が浮遊している。漁に出ることが出来ない漁師たちは次郎長に泣きついた。「死ねば仏だ。仏に官軍も賊軍もあるものか」と次郎長は、夜子分たちに舟を出させて港内に浮遊する死体を収容し、向島の松の根もとに葬った。梅蔭寺の住職宏田和尚が埋葬に立会い、経を読んだ。

後に、明治二十年四月十七日、興津清見寺で咸臨丸殉難者慰霊碑の除幕式が、旧幕臣たちによって行われた時、列席者たちは人力車を駆って清水の梅蔭寺に移動し、宏田和尚を導師として法要を行ったことが記録されている。「咸臨艦殉難諸氏

記念碑落成報告」（複製清水中央図書館蔵）には、当日の式典の精細な内容や、盲目となった美濃輪の商人小林久右ヱ門の貴重な証言などが収められている。

後日談にはもう一つ見逃すことができない事件がある。明治元年の暮れに起きた駿州赤心隊事件。徳川浪士によって暗殺された三保神社神官太田健太郎は天皇の軍隊であり、駿府藩（静岡藩）の存亡を根底から揺さぶるものであった。

駿府藩では事態を収めるため急拠、公議人杉浦梅潭を出京させ、在京の勝海舟や前島密らと協議させた。暗殺犯人らは、九月十八日の咸臨丸事件の際乗組の者たちが四ッ足御門内に拘束され、十二月十八日に釈放された正にその夜、太田健太郎を襲ったのである。どのような形で事が穏便にすまされたのか、筆者はまだその真相を知らない。

平成二十三年　秋の史跡探訪ツアー
草津温泉と追分宿、高萩万次郎の墓参

レポーター　天野　香

平成二十三年秋の史跡探訪ツアーは、渡世人時代の次郎長が頻繁に訪れたという埼玉県日高市にある高萩の万次郎の墓参と、追分宿を経て草津温泉に一泊し長野県小布施町の見学に決まった。

十一月三・四日、私たち一行の三十二名は、バスの中で田口英爾氏から、まず万次郎について解説していただく。万次郎は文化二年（一八〇五）八王子から日光に至る街道の高萩宿の名主、清水弥五郎の長男として生まれ、明治十八年（一八八五）八十一歳で亡くなる。祖父も有名な侠客で万次郎は高萩一家の三代目となる。その女房は清水出身ということから、次郎長は若い頃から万次郎を頼り、渡世人時代幕末には高萩宿をたびたび訪れ、万次郎の家に逗留したという。

こんな話を聞きながら目的地の日高市に着いた。万次郎の子孫に当たる犬竹高さんに案内され、徒歩で車の激しい道を行くと、三角点にある小さな森が墓地である。万次郎の墓以外にも多くの墓が並んでいる。道路が広がり古くからの墓地は狭くなったと犬竹さんは話す。持参した花・線香を供え、運営委員で僧籍のある林さんが導師をつとめ、一同般若心経を唱える。

犬竹さんは現在、日高市の教育委員会につとめるかたわら大東文化大学応援団の準監督をされ、先祖の万次郎について調査を進めているとのこと。犬竹さんと再会を約して次の追分宿に向かった。

鶴ヶ島ＩＣから上信越自動車道の松井田妙義ＩＣより国道十八号を行くと、北国街道と中山道の分岐点「追分分去れ」の地がある。ここも往来の激しい国道で、全員バスを下り三角地帯の「分去れ」の碑を見学する。

日本橋から四十番目の追分一里塚は、中山道六十次の内で、国道の両側に塚があるという貴重な地である。七つの石造物が立ち並んでいる。大きな常夜灯は延宝七年（一六七九）のもので、ここにある石塔の中では最古のもの。観音像もこの石仏の中では古いといわれる。馬頭観音像や歌碑など、当時の旅人が道標を見て北国街道や京都・吉野などの国々に向かったであろう。

分岐点の目と鼻の先が、追分宿西の入口である。追分宿は冷涼な高冷地だが、交通の要所である。伊勢参り、善光寺参り、草津の湯での湯治など、多くの旅人が往来し繁栄していたという。運送業も盛え、馬子が唄う「追分節」の発祥地でもある。宿内には立派な高札場跡が復元されていた。追分宿本陣の裏門が「堀辰雄文学記念館」の入口となっ

秋の次郎長史跡探訪ツアー　高萩萬次郎墓（参拝）　2011.11.3

ていた。残念ながら時間の都合で入館できなっかた。

浅間神社境内には芭蕉の句碑もあり、隣が郷土館である。郷土館では、折りしも平成二十三年が、慶長十六年（一六一一）に北国街道整備の通達が出て四百年に当たるので、本陣・脇本陣をはじめ追分宿に残された宿場史料の特別展示が開かれていた。見学の時間は少なかったが、当時の様子がよくわかり印象に残った。

秋の次郎長史跡探訪ツアー　於　草津温泉　ホテル櫻井　2011.11.3

ここからバスでホテルに向かい、一日目が終る。

二日目、すばらしい快晴にめぐまれた。ホテルよりバスで三十分、標高二一六〇メートルの白根山に着いた。晴れ渡った青空と、弓池園の碧さに心を奪われた。アップルラインを通り、中山晋平記念館に向かう。

記念館は昭和六十年に生誕百年を記念してオープンされた建物である。正面に、五線譜を型どった鐘のアーチ型の門が建ち、晋平メロディーで時を知らせている。

バスの中では長田さんのハーモニカ伴奏で中山晋平作曲の「背くらべ」「しゃぼん玉」などを合唱しながら、最後の見学地、小布施に着いた。「小布施町の魅力は文化的な雰囲気に満ちていることだ。文化は経済的繁栄のうちに築かれている」と竹内会長は『町おこしの経済学』の中で述べている。

小布施の栗は、江戸時代に献上栗として評価され、栗菓子は文化・文政時代から名物として有名である。一行は「栗おこわ定食」でランチをすませ自由散策となる。会長とは長野駅で別れ新幹線で東京に帰られた。私は以前、北斎館や高井鴻山記念館には入館しているので、今回は大川さんと土壁、白い漆喰づくり、格子窓などの街並や、味噌屋、酒屋、栗菓子屋など景観を楽しんだ。バスは諏訪湖ＳＡより朝霧高原を通って清水に向かい、参加者全員、無事に帰路に着いた。

盛り沢山の研修に、みな満足感にあふれ、紅葉のすばらしい旅の別れを惜しみつつ、次回を楽しみに別れた。

編集室から

●会報三十号は、次郎長翁を知る会第二十回総会に間に合うようお届けすることになりました。

●六月六日(水)の総会は、加藤剛さんの記念講演のため、例年のように梅蔭寺本堂ではなく、清水テルサの一階大ホールで開催します。

●総会は、六月六日十三時開場、十三時二十分総会議事開始（清水テルサ一階）平成二十三年度事業報告、決算、平成二十四年度事業計画、予算となっております。

●記念講演「加藤剛さん清水を語る」は休憩をはさんで引き続き（入場無料）十五時から大ホールで開催いたします。

●加藤さんは次男の三四郎さんといっしょに来清され、父子で出演（講演）していただくことになります。ご期待下さい。加藤剛さんは御前崎市の御出身ですが、お兄さんが三保造船にお勤めしていた関係から中学生時分から清水には何度も来られ、波止場から蒸気船に乗ったそうです。

●前号（第二十九号）で紹介した明治の医師植木重敏の曾孫植木豊さんが、「清水郷土史研究会」の研究発表で講演をされます。日時は六月二十三日(土)午後一時半から、会場は清水中央図書館三階ＡＶ室です。明治の次郎長が地元清水で尽くした医療貢献をご子孫が語ります。入場無料です。ご子孫の植木豊さんは現役のＮＨＫ大阪のチーフプロデューサーです。ご期待下さい。

●「次郎長道中保存会」が五月十三日次郎長フェスタを開催。申込問合せはヨシイカメラ　三五二―四九三三へ。